

比較文化論 : 序論 : 分布図と相関関係による考察法

著者	大林 太良
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	27-28
発行年	1990-03-10
URL	http://doi.org/10.15021/00003672

第 2 章

結 果—1 比 較 文 化 論

I. 序論 一 分布図と相関関係による考察法

大 林 太 良*

1951年アメリカの民族学者ローウィー (Lowie, Robert H.) は、スイスのすぐれたオセアニア文化史家 シュパイザー (Speiser, Felix) 追悼論文集に「地理的分布の若干の問題」を寄稿し、それを次の文章でしめくくった。

「何年も前に私 (ローウィー) は、『我々は、一つの現象の分布を知らない場合、理論的に重要なことは何も判らない』という文を記した。これは強い言葉であり、戦闘的な言葉である。そこで故マリノフスキー (Malinowski, B.) 教授は、この言葉は彼を激昂させたと私に語ったのであった。しかし、本質的には私はまだこの命題を健全だと思っている。もしも微分学と化学実験室と摩天楼が、工業文明であろうとオーストラリアの原住民のところであろうと、おかまいなしに見い出されたとしたら、これらの特徴は、それらの現在の意義とは全く異なった意義を帯びることであろう。地理的分布は、文化を理解しようとする我々の根底に横たわっていることなのだ」[LOWIE 1951: 24]。

このローウィーの言葉はたしかに強い言葉である。しかし、分布を手がかりとしてある文化要素を考察することは、民族学において長い伝統をもつ有効な方法であることに変わりはない。近年、分布の重要性がともすれば忘れられがちであるが、コンピュータの発達によって分布図作成が容易になったことは、この伝統的な方法の有効性を改めて我々に認識せしめる一つの機会であった。

ここに集められた諸寄稿は、文化クラスター共同研究のメンバーによるものであって、その資料は、1988年2月までに提出されたワークシートをコンピュータに入力したものである。利用できた文献、また民族の数などの制約があり、今回の分布図の解釈には大きな限界のあることはいうまでもない。今回の報告は他の分布研究によって補われ、また今後のより詳細な分布研究によって訂正されるべきものであることを、ここに強調しておきたい。

ところで、分布図を考察するに当っては、まず、単一の項目の分布図を読むという作業がある。これだけでも、たとえばある項目は東南アジア大陸部に局限されている

* 東京大学教養学部

というような、その分布状態から、いろいろな問題を考えてみる事ができよう。

このような分布図による研究から生ずる大きな利点はたとえば5100（科学・知識・医学）についての吉田の所見に見られる。つまり、吉田は、ニューギニア南岸まわりに東に行くルートという、従来あまり考慮されていなかった伝播ルートの可能性を指摘し、また民族移動などによらない、個々の要素の伝播の重要性にも注意を喚起したのであった。さらに一步進んで複数の分布図を重ね併せてみた場合、たとえば、A、B二つの要素の分布が一致しているとか、あるいは全く食い違っているということから、両者の機能的ないし構造的な適合性、あるいは文化史的位相づけについて、仮説をたてる事が可能である。

この点をもう少し詳しくいうと、通文化研究における要素間の関係には、ドライバー(Driver, H.E.)が指摘したように3種類が存在する。つまり、機能的 functional 関係、反機能的 dysfunctional 関係、そして非機能的 nonfunctional 関係である。

「父処婚と父系出自の関係は機能的である。というのは、これら二つの概念は、一社会の成員を同じような仕方で配列するからである。夫処婚と母系出自の間の関係は反機能的である。というのは、これら二つのグルーピングは成員を反対の仕方で配列するからだ。父処婚と巻き上げ式の籠編み技術の間の関係は非機能的である。というのは、どちらの要素も他方を助長もしなければ、反対もしないからである。アメリカ合衆国で行われた通文化的研究は、ほとんどみな、機能的および反機能的関係の研究であり、また機能的関係を因果的、進化的前後関係に配列することにかかわっている。しかしドイツの《文化圏》学派は、伝播あるいは民族移動を確定するために、非機能的関係を求めたのであった [DRIVER 1973: 338-339]。」

本共同研究は、機能的関係、反機能的関係、非機能的関係のそれぞれについても多くの新しい問題提起と研究の新しい展開への刺激を意味している。第1章でも指摘したように、われわれは、相関関係の機能的解釈と歴史的解釈の双方に関心をもっている。個別の諸報告は東南アジア、オセアニアの文化史研究に対する寄与であるとともに、要素間の組合せ（たとえば産小屋と若者宿）についての従来の説の再検討も含まれている。

以下の試みは、東南アジア、オセアニア民族学における我が国は言うまでもなく世界的にもまだなかったような大きなパースペクティブを得るために、大きく一步を踏み出したことを意味している。われわれはこれをさらに発展させて、大きな総合に向かって進みつつあるのである。